

2022年4月24日（日） 近畿旧友会ハイキングクラブ さんぽかい 燦歩会例会（第513回）

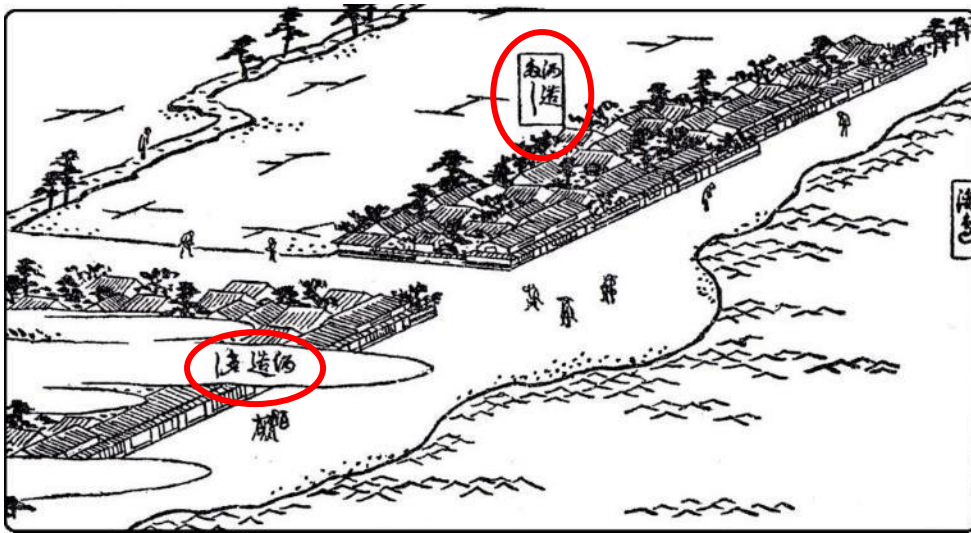
## 灘五郷の酒蔵をめぐる（兵庫）

春爛漫！！ の筈が、冷たい雨に打たれながらの酒蔵めぐりになりました。

（時々カメラのレンズに水滴が付いていますがご容赦下さい）

所は天下の酒蔵、江戸で呑む酒の8割を送り出したと云われ、今日も日本酒の25%を生み出すと云われる、灘五郷（なだごこう）。

この日は、神戸市灘区と東灘区の三つの郷、西郷、御影郷、魚崎郷（にしごう、みかげごう、うおざきごう）で、5つの酒蔵を巡りました。



江戸時代、1700年代の末頃に出版された「摂津名所図会」の灘の辺りです。海辺の街道に沿って建ち並ぶ家々。暮らし向きも良さそうです。赤○2カ所に「酒造多し」と記されています。この頃既に酒造地として盛んだった訳です。

午前10時、阪神電車大石駅に集合。男性9人、女性3人。雨にもかかわらず、参加多数です。まず南に、海の方へ坂を下ります。

見かけたのは「旧西国浜街道」という背丈を超える大きな石碑です。西国（九州～下関）と京都（東寺口）を結ぶ江戸時代の重要な幹線道路「西国街道」は、この辺りでは山側と海側の二筋に分かれていました。間隔はおよそ1km。山沿いの西国本街道に対して、海沿いのルートは、「浜街道」と呼ばれていました。冒頭の絵図で、旅人や商人が行き交っていた海辺の道筋です。今は静かな町です。



道が二筋もあるという事は、それだけ町が大きく経済活動も盛んだったという事でしょう。酒蔵はこの浜街道沿いに営まれていました。

坂を下りきって先ず「沢の鶴資料館」を訪ねます。



創業は1717（享保2）年。当時は両替商で、大名の蔵屋敷に出入りし、藩米を取り扱っていました。それが副業で酒を造り始めます。当時の屋号は米屋。商標が※印なのはそのためで、伝統を守って『純米』に自信をもつという事です。

1978（昭和53）年以来、古い酒蔵をそのまま資料館として公開して来ましたが、阪神淡路大震災で全壊。その後1999（平成11）年に免振システムを施して、再建されたものです。大きな樽が並ぶ館内は壮観で、実際に酒造りに携わった方が解説して下さいました。

再現された「室（むろ）」も見学出来ました。蒸した米に麹の胞子を振りかけて繁殖させる、いわば温室です。天井を低くした密閉に近い部屋。中央に大きく横たわるのが発酵中の米です。昔の蔵人たちは、蒸し暑い室の中で、40時間不眠不休で作業したと伝えられています。



試飲も美味しく、下戸の私は「古酒仕込み梅酒」をいただきました。「紀州」で育てられた「南高梅」を、3年以上熟成させた酒に漬けこんだもので、旨みや深みが、南高梅の程よい酸味を引き立てているという事でした。

灘には酒造地の様々な条件が揃っていたといわれます。米は「山田錦」をはじめ播州の良質の酒米。水はミネラルが豊富で天与の名水と云われる「宮水」。職人は名高い「丹波杜氏」。寒造りに最適な六甲嵐（おろし）の寒風。急流で回す水車で精米の質と量が向上。製品の輸送に便利な港があったこと、などなどです。



この道筋は「西郷（にしごう）酒蔵の道」と名付けられています。

立ち並ぶ巨大な酒造タンクの間を、東に向かいます。



続いて訪ねたのは、「甲南漬け資料館」です。関西の方には言うまでもない事ですが、甲南は「六甲山の南」を意味します。この辺りすでに御影郷（みかげごう）です。



1930（昭和5）年に建てられた経営者の旧邸で、当時阪神の資産家の間で流行したモダンな建築の1つです。

（国・登録有形文化財建造物）

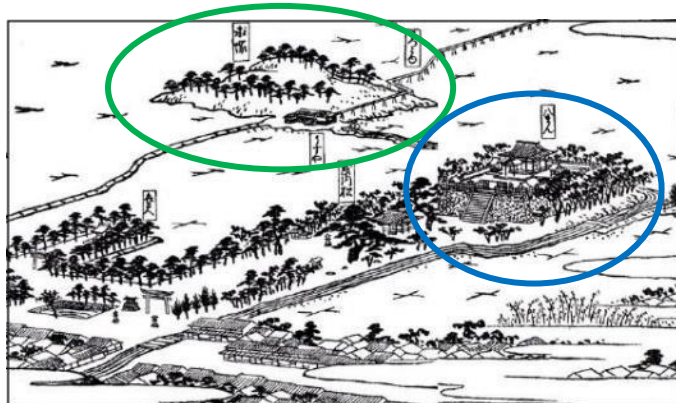
当時最先端の設備を揃え、トイレも洋式です。満開の桜が潇洒なビルに映えた事でしょう。



創業 1870（明治3）年。元々酒粕の仲買業を営んでいましたが、酒粕から焼酎、本味酴、そして奈良漬を作るようになります。

日露戦争が終結し、日本国中が戦勝景気で進物として奈良漬が大変よく売れたということです。缶入りのこんなおしゃれな漬物のセットもあったようです。

「うり」「きゅうり」「すいか」の甲南付漬けをいただきました。



厩前にもう一カ所、「処女塚（おとめづか）」に向かいます。

処女塚古墳は、墳丘の長さおよそ70m、4世紀ごろの前方後方墳で、国の史跡に指定されています。名所図会では、町のやや北に「求塚」（**緑○**）と記されています。当時は田園の中にぽっかりと浮かんでいた訳です。

現在の処女塚は、街並みの中にすっかり囲まれています。西隣には立派な「八幡」の社（**青○**）が今もあって、歴史が引き継がれている事を納得させられます。



この古墳を中にして、2km西に1つ、また1.5km東にも1つ 古墳があります。  
広々とした海辺に一直線に並ぶ3つの小山。遥かに見渡す古代の人々にとって、その景色は、  
墳墓という意識はあったでしょうし、何か因縁めいた不思議なものを感じたのでしょうか。  
そこから哀しい物語が生まれますが、それは補足に譲り、先に進みます。



「福寿」は1751（宝暦元）年の創業。ノーベル賞晩餐会に欠かさないお酒になっています。  
2008年に日本の学者4名が受賞した時以来、日本人受賞者が出た年は、福寿の「純米吟醸 ブルーボトル」が、晩餐会で振舞われる事になっているのです。

昼食後、  
大きな酒樽の前で全員写真です。



雨もあがりました。東へ向かいます。  
白鶴酒造資料館です。

1743（寛保3）年の創業、資料館は大正初期に建造された酒蔵でしたが、やはり震災の被害を受け、再建されたものです。  
試飲は「にごりゆず酒」をいただきました。



魚崎郷（うおざきごう）に入りました。5カ所目の酒蔵、菊正宗酒造記念館です。  
いかにも酒蔵らしい外観。1659（万治2）年創業以来「本流辛口」を守り続けています。



最後に訪ねるのは、文豪谷崎潤一郎の旧居「倚松庵（いしょうあん）」です。

住吉川の河道を上流へ向かいます。かなり急な流れです。



1923（大正 12）年の関東大震災の後、関西に移住した谷崎は、1936（昭和 11）年にこの地に引っ越して来ます。実際の当時の家は 150m ほど南にあり、1990（平成 2）年に六甲ライナーの建設に伴い、この場所に移築されました。前の年に結婚した松子夫人と連れ子、夫人の二人の妹との暮らしです。1・2 階合わせて 148 m<sup>2</sup>ありますが、その人数では、手狭だったのではないのでしょうか？ 実は谷崎は庭に書斎を建てて仕事していたという事です。庵の呼び名「倚松庵」は夫人の名に因んでいて、「松に寄りかかる、松に頼る」ような意味合いがあり、夫人への愛情のこもったものと考えられています。



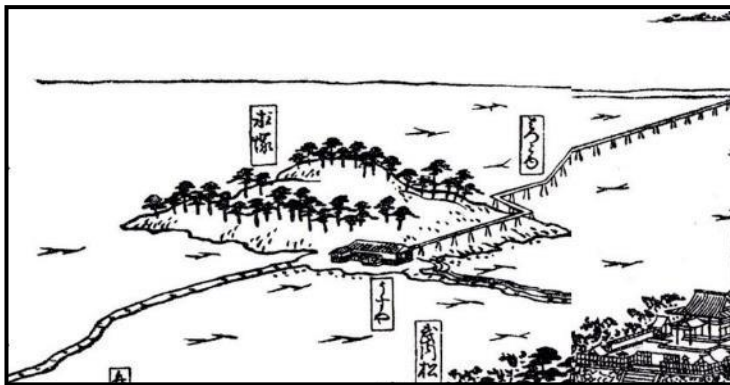
この家での暮らしの中で生まれたのが、松子夫人や姉妹をモデルにした名作「細雪」です。1 階の洋間、2 階の和室、暮らしのありさまが細々と描かれています。この家は、まさに「細雪」の家なのです。緑豊かな町、昔懐かしい佇まい、広々とした窓、室内を見ても住み心地の良さがうかがわれます。引っ越し魔と言われ、生涯に 40 回以上転居した谷崎にしては、この家には 7 年住まいます。（家主とのトラブルが無ければ、もっと居たかったとも）それだけ気に入っていたのでしょう。

15時に倚松庵の前で解散しました。

\*\*\*\*\*

相変わらずの補足・蛇足で失礼します。

水樋の事



摂津名所図会の処女塚（おとめづか）の隣に、面白いものを見ました。

右上からジグザグに左下へ向かっている線。標記は「みづとゆ」でしょうか？ 字は「水樋」でしょうか？ 足場を組んで、溝を載せて水を延々と送っているようです。

そして樋は、その先処女塚の裾にある小屋に入っています。標記は「うすや」です。臼の小屋でしょうか？ とすれば、酒造り用の精米工場だったのかも知れません。そしてその水は、用水となって町へ向かっています。同様の樋は、西求女塚の近くにも見られました。

### 甑（こしき）の底、「さる」の事

酒造資料館で見かけた甑（こしき）の底がどうなっているのか、気になりました。

いわば、超大型の蒸籠（せいろう）です。大釜に湯を沸かして蒸気を挙げ、蒸籠に入っている米を蒸すのです。

写真の大釜は菊正宗酒造記念館の外に展示されている物。甑とさるは沢の鶴資料館のものです。



甑にギッシリ詰まった米の重さは大変なものでしょう。それに耐える底で、しかも蒸気を通すのは何か？ 竹網などでは重さにかないません。答えは右端の写真、一辺が30cm程、厚さ10cm程の木材を加工した「さる」と呼ばれるものでした。呼び名の由来は猿の伏した姿に似ているとか、色が猿のようだからとも。上に見える四角い穴が、甑の底の穴で、ここから釜の蒸気が吹き上がります。その穴にこの「さる」をかぶせるのですが、パンフレットの写真の方が分かりやすいので参照します。

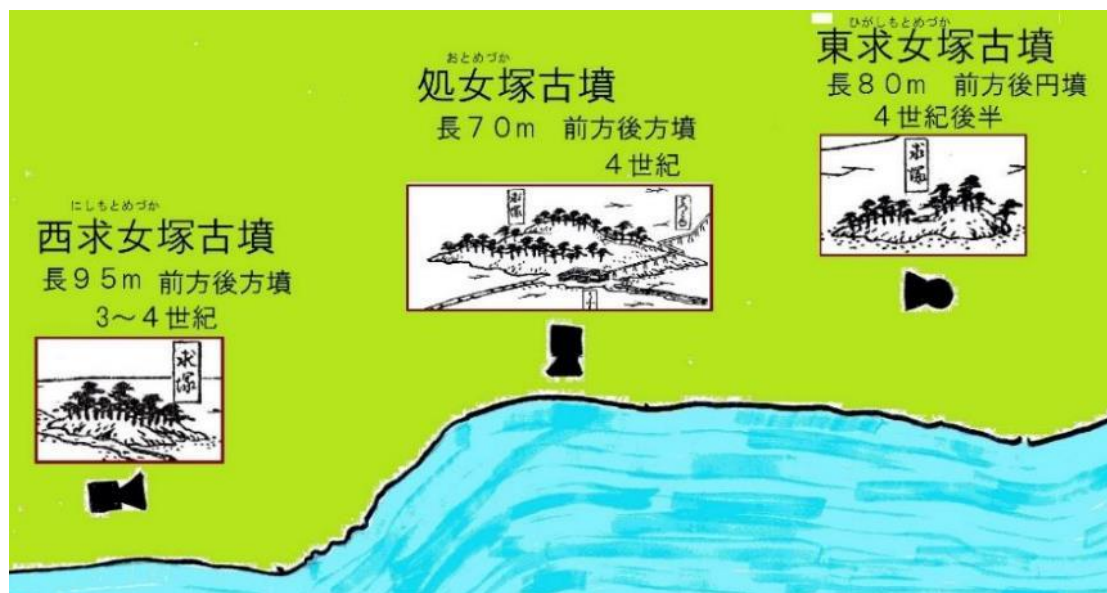
真ん中に大きな窪みがあり、そこに吹き上がった蒸気は、八方向に切られた溝に沿って噴き出して、周囲のコメを蒸して行くのです。



### 三つの古墳の事

名所図会ではすべて「求塚」と記されている三つの古墳の概要を図にしてみました。

海岸線は、埋め立ての進む前、明治頃の線です。



海沿いに一列に、等間隔に並ぶ三つの墳墓。造られた時期は3世紀後半から4世紀後半まで。海を行く船からは三つの小山があたかも向かい合っているかのように見えた事でしょう。



やがて悲しい伝説が生まれます。美少女菟原処女（うないのおとめ）は二人の男に慕われ求婚されますが、板挟みに悩んだ末に自ら命を絶ち、男二人も後を追ったのです。憐れんだ人々は、娘の墓を中央に、男二人の墓を両側に築いて弔ったというのです。その伝説は後の万葉時代の人々にも伝わり想像力を一層掻き立てたようです。田辺福麻呂、高橋虫麻呂、そしてなんと大歌人大伴家持までもが、この光景を題材に詠っているのです。

田辺福麻呂の「葦屋の処女（おとめ）の墓を過ぎし時作れる歌一首」を拾い読みします。

「古のますら壮士（おとこ）の 相競い 妻問いしけむ 葦屋の 菟原処女の 奥津城を わが立ち見れば 永き世の 語りにしつつ後人の 思ひにせむと玉梓の 道の辺近く 岩構へ 造れる塚を……」（万葉集 巻9—1809）こんな風に訳されています。「昔の雄々しい男たちが競って求婚した葦屋の菟原娘の墓所の前に立って眺めると、長い行く末の語り草にしようと、後の人々の、思ふよすがにしようと、道の近くに岩を構えて造った塚を……」

万葉集に詠われた伝説は、平安時代の「大和物語」に伝えられ、やがて謡曲「求塚」になり、森鷗外も戯曲「生田川」として作品にするのです。

男たちの墓の物語、その元になった二つの古墳です。西求女塚古墳（にしもとめづかこふん）は、古墳の前部の輪郭が「バチ型」の前方後方墳で、3～4世紀初め頃に築造された最古級の古墳です。

慶長年間の1596年「伏見地震」で墳丘が10m程横滑りして崩れた石室の跡などが確認されています。また1993（平成5）年には三角縁神獣鏡が7面出土しています。



東求女塚古墳（ひがしもとめづかこふん）は、明治36・7年の阪神電車敷設の際に封土が削り取られ、後円部の一部だけが公園の中に取り残されています。すぐ側の幼稚園改築の際の発掘調査で、4世紀後半の全長約80mの前方後円墳であることが確認されています。



処女塚と合わせて3つとも、この地の豪族の墓と考えられています。

### 日本一金持ちの村

谷崎潤一郎は1936（昭和11）年50歳の時、住吉村反高林（たんだかばやし）に越して来ます。この「反高」という耳慣れない言葉は、「収穫が見込めず年貢を掛けない」と云うような意味の、江戸時代の税計算の用語で、それが地名として残った訳です。

所がそんな不毛の筈の林が、住宅地としては絶好の立地で大化け。多くの有力者が住み着き、「郊外住宅地」がここに始まるのです。ランダムに挙げるだけでも、朝日新聞社主、住友銀行頭取、東洋紡績社長、鐘紡社長、日本生命社長、大林組社長、武田薬品社長……。

住吉村は「日本一の金持ちの村」と呼ばれ、谷崎もそんな村の片隅の一員だったのです。

\*\*\*\*\*

ご案内

旧友会員の方、職員の方、入会大歓迎です。メンバーは現在34名です。  
入念な下見を行い、中途離脱も可能なルートを設定して、毎月第4日曜日に歩いています。

今後の予定は、 ◎大阪空港 迫力の滑走路を一周（大阪・兵庫） ◎京街道を高麗橋から守口へ（大阪） ◎信楽高原鉄道・陶芸の森（滋賀）◎隠岐の島ツアー（島根）◎天理軽便鉄道跡を歩く（奈良）◎京都トレイル（第5回） ◎浪花文学散歩（大阪）◎寿長生（すない）の郷（滋賀） ◎京の五花街を巡る（後半）（京都）  
ただし、コロナの推移に合わせて、柔軟に対応して行きます。

参加ご希望の方は、会務担当 山村恵一にご連絡下さい。  
（電話：090-1484-4403、メール：y-yamamura@ares.eonet.ne.jp）

コロナに注意しながら、一緒に気軽に楽しく歩きましょう。（写真・文 生島 幸弥）